

# 小品系般若經の頭陀支

## 阿 部 慈 園

I パーリ仏教すなわち南方上座部における頭陀支 (dhutaṅga, dhūtaṅga) の確定型は次の13支(衣2, 食5, 住6)である<sup>1)</sup>。ちなみに、それらに相当する, *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* (ASP)\* および *Aṣṭādaśasāhasrikā Prajñāpāramitā* (ADSP)\*\*<sup>2)</sup> にあらわれるサンスクリット語形を: の後に付記する。

- |                                               |                                           |
|-----------------------------------------------|-------------------------------------------|
| (1) pamsukūlikaṅga ( <b>pa</b> 糞掃衣支)          | : pāmsukūlika* **                         |
| (2) tecīvarikaṅga ( <b>te</b> 三衣支)            | : traicīvarika* **                        |
| (3) piṇḍapātikaṅga ( <b>pi</b> 常乞食支)          | : piṇḍapātika* **                         |
| (4) sapadānacārikaṅga ( <b>sa</b> 次第乞食支)      | : —                                       |
| (5) ekāsanikaṅga ( <b>ek</b> 一坐食支)            | : ekāsanika* **                           |
| (6) pattapiṇḍikaṅga ( <b>pat</b> 一鉢食支)        | : prāptapiṇḍika**                         |
| (7) khalupacchābhattikaṅga ( <b>kh</b> 時後不食支) | : khalupāścādbhaktika* **                 |
| (8) ārañṇikaṅga ( <b>ā</b> 阿蘭若住支)             | : āraṇyika* **                            |
| (9) rukkhamūlikaṅga ( <b>ru</b> 樹下住支)         | : vṛkṣamūlika* **                         |
| (10) abbhokāsikaṅga ( <b>ab</b> 露地住支)         | : abyavakāśika*, ābhy <sup>o</sup> **     |
| (11) sosānikaṅga ( <b>sa</b> 塚間住支)            | : śmaśānika*, śmā <sup>o</sup> **         |
| (12) yathāsanthatikaṅga ( <b>ya</b> 隨得敷具支)    | : yathāsaṃstarika*, yāthā <sup>o</sup> ** |
| (13) nesajjikaṅga ( <b>ne</b> 常坐不臥支)          | : naiṣadyika* **                          |

各支の略号は、便宜上パーリ系のそれを以下用いる。さて一般にパーリ系の頭陀支は13支、大乘系のそれは12支といわれているが、般若經典である ASP, ADSP もともに **sa** を欠く12支を挙げる。ただし、ASP は ADSP のもつ **pat** を欠き、そのかわりに **nāmantika** (**nā** 毳衣, 毛織物で作った衣) を加えている。

興味あることに、パーリ聖典ではおおむね dhutaṅga (頭陀の支分) という語が用いられる<sup>3)</sup> のに対し、大乘經典では dhutaṅga (頭陀の徳目) というタームが用いられる<sup>4)</sup>。また、漢訳大乘經典では、旧訳で「頭陀功德」<sup>5)</sup> 新訳で「杜多功德」<sup>6)</sup> の訳語が見える。それらの原語は dhutaṅga であったことが知られる。一方パーリ系の漢訳、たとえば『解脫道論』には「頭陀分」<sup>7)</sup> の訳語が見えるが、その原語は dhutaṅga であったことは明きらかである。ちなみに、dhutaṅga, dhutaṅga に相当するチベット語はそれぞれ sbyaṅs paḥi yaṅ lag, sbyaṅs paḥi yon taṅ<sup>8)</sup> で

ある。両語の意味するところは同じとここでは見る<sup>6)</sup>。

さて、本稿では小品系般若経群における頭陀支（＝頭陀功德）を検討する。小品系における頭陀支については別稿を記している<sup>10)</sup>。なお『般若経』の頭陀説については水野弘元博士の研究<sup>11)</sup>がある。

II まず、『毘尼母經（毘尼母）』は法藏部所伝の『四分律』の Mātrkā（本母）といわれるが、この説を承けつつ水野博士は、『般若経』が掲げている 12 頭陀説は法藏部のものから採用したか、その影響下に述べられたものであろう、といわれた<sup>12)</sup>。それゆえ、『毘尼母』における頭陀支を吟味することから始めよう。

(1) 常自行<sub>レ</sub> 空閑静処<sub>レ</sub> 亦当<sub>レ</sub> 讚<sub>レ</sub> 彼閑静之處<sub>レ</sub> (2) 乞食 (3) 糞掃衣 (4) 若有瞋<sub>レ</sub> 心<sub>レ</sub> 止不<sub>レ</sub> 食減已乃食 (5) 一坐食 (6) 一時受取 (7) 常塚間行 (8) 露地坐 (9) 樹下住 (10) 常坐不臥 (11) 隨得敷具 (12) 齊<sub>二</sub> 三衣<sub>一</sub> (大正24・804c)

(1)の「行空閑静処」は **ā** と見る<sup>13)</sup>。(4)はパーリ頭陀支には見られない。訳語の不定か誤解の可能性もある。水野博士は **pat** と見られる<sup>14)</sup> が、筆者は **kh** と見たい。(6)を博士は **kh** と見られる<sup>15)</sup> が、筆者は **pat** と見たい。『毘尼母』の 12支を略号を用いて表わすと、**ā・pi・pa・kh・ek・pat・so・ab・ru・ne・ya・te** となる。前3支 **ā・pi・pa** はそれぞれ住・食・衣の代表支であり、かつ頭陀支の原型である<sup>16)</sup>。ついで食3支・住5支・衣1支と続く頭陀支型である。第4支以後には、明きらかな衣食住の配列意図がうかがわれる。

次に、『四分律』が掲げる2種の頭陀支を次に挙げる。

A: (1) 樂<sub>二</sub> 閑静處<sub>一</sub> (2) 時到乞食 (3) 著<sub>二</sub> 糞掃衣<sub>一</sub> (4) 作<sub>二</sub> 余食法<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub> 食 (5) 一坐食 (6) 一搏食 (7) 塚間坐 (8) 露坐 (9) 樹下坐 (10) 常坐 (11) 隨坐 (12) 持<sub>二</sub> 三衣<sub>一</sub> (大正22・582b)

B: (1) 阿蘭若 (2) 乞食 (3) 著<sub>二</sub> 糞掃衣<sub>一</sub> (4) 作<sub>二</sub> 余食法<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub> 食 (5) 一坐食 (6) 一搏食 (7) 塚間坐 (8) 露地坐 (9) 樹下坐 (10) 常坐 (11) 隨坐 (12) 持<sub>二</sub> 三衣<sub>一</sub> (大正22・859c)

AB間で(1)(2)(8)にて訳語が異なるが内容は同じい。(6)は「一鉢食(**pat**)」と同義と見る。『毘尼母』と比べて訳語がより統一されている。AよりBの方がさらに整っている。**ā・pi・pa・kh・ek・pat・so・ab・ru・ne・ya・te** が AB『四分律』の頭陀支型であり、『毘尼母』のそれと全同となる。

III また、羅什訳『小品般若波羅蜜經（小品）』が掲げる頭陀支は次の如し。

(1) 受<sub>二</sub> 阿練若法<sub>一</sub> (2) 乞食 (3) 著<sub>二</sub> 納衣<sub>一</sub> (4) 食後不<sub>レ</sub> 飲<sub>レ</sub> 漿 (5) 一坐食 (6) 節量食 (7) 住<sub>二</sub> 死屍間<sub>一</sub> (8) 坐<sub>二</sub> 空地<sub>一</sub> (9) 坐<sub>二</sub> 樹下<sub>一</sub> (10) 常坐不臥

(11) 隨敷坐 (12) 少欲知足遠離 (13) 不<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>塗<sub>二</sub>脚油<sub>一</sub> (14) 樂<sub>二</sub>少語少論<sub>一</sub> (大正8・570b)

(4) の「食後に漿を飲まず」は **kh** に配当する。「漿（ジュース）」とは『大智度論』によれば、「果漿・蜜漿」などをいう<sup>17)</sup>。(6) は「一鉢食」と同じ。(12) 以下3支は、頭陀支の受持の目的ないしは功德（利益 ānisaṃsa）などであり、いわば頭陀支に準ずる付加的なものと思われ、ここでは正規の支分としては認めない<sup>18)</sup>。従って、『小品』の頭陀支は **ā·pi·pa·kh·ek·pat·so·ab·ru·ne·ya** となる。この11支は、『毘尼母』『四分律』の前11支と同じい。何故に、『小品』は両者が第12支に掲げる **te** を省いているのであろうか？ 考えられる可能性として二つある。(1) 文面どうりに読んで、『小品』の頭陀支型は11支であったか、(2) 『小品』にて、第12支目に **te** が欠落しているか、である。このことについては後述する。

IV 次に梵本 ASP およびチベット訳 ASP の頭陀支をながめてみよう。

(1) āraṇyaka (2) pṇḍapātika (3) pāṃsukūlika (4) khalupaścādbhaktika (5) ekāsanika (6) yathāsaṃstarika (7) traicīvarika (8) śmaśānika (9) vṛkṣamūlika (10) naiṣadyika (11) abhyavakāśika (12) nāmantika (13) alpecca-saṃtuṣṭa-pravivikta (少欲・知足・遠離) (14) apagata-pāda-mrakṣaṇa (足に油を塗らぬこと) (15) mṛdubhāṣy-alpavāc (優しく語ること・言葉少なきこと)<sup>2)</sup>

(13) (14) (15) は、それぞれが対応する『小品』の (12) (13) (14) と同じ扱いとする。しからば、ASP も12支となる。ただし、第12支 **nā** は、『毘尼母』『四分律』『小品』の説かぬものであり、パーリ聖典における頭陀支群にも見られない。

チベット訳 ASP<sup>19)</sup> も、梵文 ASP と同じい。ASP の頭陀支を略号で示すと、**ā·pi·pa·kh·ek·ya·te·so·ru·ne·ab·nā** となる。原型3支・食2支・住支・衣支・住4支・衣支の列挙である。第4支以後は衣食住の配列意図がなされているとは見がたい(ただし、**ya** と **nā** が入れかわるか、**te** が **nā** の直前に配されれば、衣食住あるいは食住衣の配列となる)。また、前5支は『毘尼母』『四分律』『小品』と同じである。第6・7支の **ya·te** は、『毘尼母』『四分律』の第11・12支に配されるものである。住4支 **so·ru·ne·ab** は『毘尼母』『四分律』『小品』の **so·ab·ru·ne** と比べると、**ab** が住4支の最後に配されている。

**pat** のかわりに **nā** が第12支に来ていることはすでに指摘したが、**nā** をもつ頭陀支型は『十住毘婆沙論（十住論）』『瑜伽師地論』『大般涅槃經』『法集多數經』<sup>20)</sup>、また *Mahāvvyutpatti* (1130) にあらわれる。**nā** については別稿を期す。

ちなみに、『十住論』の頭陀支と ASP のそれを比較してみよう。『十住論』も 12 支をたてるが、**ā·pi** の 2 支が **pa** 以下の 10 支を開くという説き方をする。

(1) 空閑法 (2) 乞食法 (3) 著<sub>二</sub> 糞掃衣<sub>一</sub> (4) 一坐 (5) 常坐 (6) 食後不<sub>レ</sub>受<sub>二</sub> 非時飲食<sub>一</sub> (7) 但有<sub>二</sub> 三衣<sub>一</sub> (8) 毳衣 (9) 隨<sub>二</sub> 敷坐<sub>一</sub> (10) 樹下住 (11) 空地住 (12) 死人間住 (大正26・114bc)

略号をもって両者の頭陀支をあらわそう。

十住論: ā·pi·pa·ek·ne·kh·te·nā·ya·ru·ab·so

ASP: ā·pi·pa·kh·ek·ya·te·so·ru·ne·ab·nā

原型 3 支はともに同じい。第 5 支以下は列挙順序が異なる。第 7, 11 支 **te, ab** がかりうじて同位置である。『十住論』も第 4 支以下衣食住の配列意図が顕著ではないが、仮に食支の **ek** と **kh** の間にある **ne** が **ya** 以下の住支群に加われば、食 2・衣 2 (**te·nā**)・住 5 の整った型とはなる。ともあれ、注目すべきは両者の 12 の支分それぞれが全同であることである。

V 次に玄奘訳『大般若波羅蜜多經（第 4 会）』の頭陀支を検討しよう。

(1) 居<sub>二</sub> 阿練若<sub>一</sub> (2) 常乞食 (3) 受<sub>二</sub> 一食<sub>一</sub> (4) 一坐食 (5) 一鉢食 (6) 居<sub>二</sub> 塚間<sub>一</sub> (7) 居<sub>二</sub> 露地<sub>一</sub> (8) 居<sub>二</sub> 樹下<sub>一</sub> (9) 糞掃衣 (10) 但三衣 (11) 常坐不臥 (12) 如<sub>二</sub> 旧敷具<sub>一</sub> (13) 少欲 (14) 喜足 (15) 樂<sub>二</sub> 遠離<sub>一</sub> (16) 樂<sub>二</sub> 寂定<sub>一</sub> (17) 具<sub>二</sub> 正念<sub>一</sub> (18) 具<sub>二</sub> 妙慧<sub>一</sub> (19) 不<sub>レ</sub>重<sub>二</sub> 利養<sub>一</sub> (20) 不<sub>レ</sub>貴<sub>二</sub> 名譽<sub>一</sub> (21) 好<sub>二</sub> 廉儉<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>塗<sub>二</sub> 其足<sub>一</sub> (22) 省<sub>二</sub> 睡眠<sub>一</sub> (23) 離<sub>二</sub> 掉挙<sub>一</sub> (24) 好<sub>二</sub> 少言<sub>一</sub> (25) 樂軟語 (大正7・837bc)

(3)「受一食」は、『毘尼母』の(6)「一時受取」と同じく **kh** と見る。(13)~(25) は、『小品』の(12)~(14) および ASP の(13)~(15) と同じ扱いとする。なお、『第 4 会』の(13)(14)(15) は『小品』の(12) および ASP の(13) に、同じく(21)は『小品』の(13) および ASP (14) に、同じく(24)(25)は『小品』の(14) および ASP (15) に相当する。しからば、この『第 4 会』は『小品』・ASP より増広されているといえよう。『第 4 会』頭陀支の略号は次の如し。

ā·pi·kh·ek·pat·so·ab·ru·pa·te·ne·ya

**pa** を第 9 支に置き、原型 3 支を前 3 支に配しないところが、いままでの頭陀支型と異なる。ただし、全頭陀支の代表支ともいわれる **ā** を第 1 支に置き、食 4 支・住 3 支・衣 2 支・住 2 支と続くこの頭陀支型は、いくばくかの配列意図がなされているようである。なお、12 支それぞれは、『毘尼母』『四分律』、後述する『仏母』と共有している。付言すべきは、『第 4 会』の余所 (同812a) にも頭陀支が言

及されていることであるが、そこでは、ただ「十二杜多功德」とあるのみで、各支分の名目は省略されている。

VI 次にやはり小品系とされる宋の施護訳『仏母出生三法藏般若波羅蜜多經（仏母）』の頭陀支をながめてみよう。

- (1) 阿囉拏法 (2) 常行<sub>二</sub> 乞食<sub>一</sub> (3) 著<sub>二</sub> 糞掃衣<sub>一</sub> (4) 飲食已後不<sub>二</sub> 復飲<sub>レ</sub> 漿 (5) 常一坐食 (6) 常隨<sub>二</sub> 敷坐<sub>一</sub> (7) 但持<sub>二</sub> 三衣<sub>一</sub> (8) 住<sub>二</sub> 尸陀林<sub>一</sub> (9) 坐<sub>二</sub> 於樹下<sub>一</sub> (10) 坐<sub>二</sub> 於空地<sub>一</sub> (11) 常節量食 (12) 常坐不臥 (大正8・652ab)

(1) の「阿囉拏」は āryaṇiyaka の音写で、「阿蘭若」「阿練若」と同じい。12支をたてるが、第4支以下はやはり衣食住の配列意図を明瞭にうかがうことができない。ASP, 『毘尼母』と『仏母』とを比較してみよう。

仏 母：ā・pi・pa・kh・ek・ya・te・so・ru・ab・pat・ne

ASP：ā・pi・pa・kh・ek・ya・te・so・ru・ne・ab・nā

毘尼母：ā・pi・pa・kh・ek・pat・so・ab・ru・ne・ya・te

『仏母』は ASP の前9支と配列順序は同じで、11支は共通であるが、**nā** のかわりに **pat** をもつ。従って、『毘尼母』の12支と共通である。ただし、第6支以下の配列順序を異にする。

『仏母』における注目すべき記述は、12の「頭陀功德」すなわち「頭陀の支分」群と、それにともなう種々の功德（利益）群（少語・喜足・遠離……乃至不<sub>レ</sub> 受<sub>レ</sub> 塗<sub>二</sub> 足油<sub>一</sub> 等……如是種種功德）とを別立していること（同652b）である。

VII なお、『小品』や『第4会』『仏母』に先行すると見られる小品系般若經典に『道行般若經（道行）』（後漢・支婁迦讖訳）、『大明度經』（呉・支謙訳）、『摩訶般若鈔經（鈔經）』があるが、それらの頭陀支にも触れておこう。

まず、『道行』は次の14支を挙げる。

- (1) 自字(?) (2) 乞食 (**pa**) (3) 一処飯 (4) 就飯 (5) 先噉<sub>二</sub> 果菜(菰)<sub>一</sub> 却食<sub>レ</sub> 飯 (6) 在<sub>二</sub> 丘墓間<sub>一</sub> (**so**) (6) 露地 (**ab**) (8) 在<sub>二</sub> 樹間<sub>一</sub> 止 (**ru**) (9) 有<sub>レ</sub> 受<sub>レ</sub> 請者 (10) 不<sub>レ</sub> 受<sub>レ</sub> 請 (11) 多少取足 (12) 麻油不<sub>レ</sub> 塗<sub>レ</sub> 身 (13) 語声好 (14) 巧談語 (大正8・460b)

このうち明確に頭陀の支分と判定できるのは (2) (6) (7) (8) くらいで、他は訳語として難渋であったり、頭陀の功德（利益）などを含んでもおり、それゆえ『道行』の頭陀支は『小品』などと同等に扱うことはここでは避けたい。

『大明度經』には当該箇所は見当たらない。『鈔經』も、『道行』の文面とほぼ同じである。ただ『道行』の (12) と (13) の間に「一処止」が加えられている。

VIII 以下、『毘尼母』『四分律』と小品系般若經典の4種と『十住論』の都合6種の頭陀支の比較表を示そう。

|                | ā | pī | pa | kh | ek | pat | so | ab | ru | ne | ya | te   | nā |
|----------------|---|----|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|------|----|
| (i) 毘尼母<br>四分律 | 1 | 2  | 3  | 4  | 5  | 6   | 7  | 8  | 9  | 10 | 11 | 12   |    |
| (ii) 小品        | 1 | 2  | 3  | 4  | 5  | 6   | 7  | 8  | 9  | 10 | 11 | (12) |    |
| (iii) ASP      | 1 | 2  | 3  | 4  | 5  | ×   | 8  | 11 | 9  | 10 | 6  | 7    | 12 |
| (iv) 第4会       | 1 | 2  | 9  | 3  | 4  | 5   | 6  | 7  | 8  | 11 | 12 | 10   |    |
| (v) 仏母         | 1 | 2  | 3  | 4  | 5  | 11  | 8  | 10 | 9  | 12 | 6  | 7    |    |
| (vi) 十住論       | 1 | 2  | 3  | 6  | 4  | ×   | 12 | 11 | 10 | 5  | 9  | 7    | 8  |

この比較表より、また上述の考察より、次のことが確認されるであろう。

(1) 『小品』の頭陀支は、法藏部所伝の『毘尼母』『四分律』のそれを直接継承しており、その支分は11と見るよりも、**te**を加えた12支と見る方が妥当であること。(2) APSの頭陀支は(1)とは別系統の伝承をふまえており、むしろ『十住論』のそれと親近性をもっていること。(3) 『第4会』の頭陀支は、『小品』と深い関わりをもちつつも、その列举順序が独特であること。(4) 『仏母』の頭陀支は、支分については『毘尼母』乃至『小品』と共通であるが、列举順序がAPSと少しく関わりがあること。(5) 従って、小品系般若經の頭陀支は4種の伝承が認められること。

1) *Visuddhimagga* (*Vis*), HOS 版, II-2 など。 2) ASP, VAIDYA 本, p. 192; ADSP, CONZE 本, pp. 8-9。 3) *Vis* II-1 など。ただし, *Vinaya* iii 15 (PTS 版) には, dhūta-guṇa の語が見える。また, *Vinaya* ii 196; iii 171 には単に vatthu とある。 4) ASP, p. 192; ADSP, p. 9。 5) 『十住毘婆沙論』, 大正 26・114b など。 6) 『大般若波羅蜜多經』, 大正 6・546c など。 7) 大正 32・406b。 8) *Vimuktimārga Dhutagūṇanirdeśa*, ed. by P. V. BAPAT, 1964, p. 72。 9) P. V. BAPAT: *Dhutaṅgas, IHQ*, Vol. XIII, Calcutta, 1937, p. 47。 10) 阿部「般若經類の頭陀支」, 『高崎直道博士還暦記念・印度学仏教学論集』(出版予定)。 11) 水野弘元「大乘仏教と部派仏教との関係」, 『大乘仏教の成立史的研究』所収。 12) 水野明掲論文, p. 307。 13) 同, p. 306。 14) 15) 同, p. 304。 16) 阿部「Pāli Vinaya における頭陀支」, 『印仏研』28-2。 17) 大正 27・538a。 18) 本稿 VI 参照。 19) 北京版21卷, p. 149, 2 段目 II. 5~7。 20) それぞれ大正 26・114b (毘衣), 大正 30・422a (但持毘衣), 大正 12・527b (毘衣), 大正 17・661a (同)。  
追記: 東方研究会専任研究員・種智院大学講師 山口務氏より資料の提供と甚大な御教示を得た。ここに記して感謝の意を表したい。(15-8-1986)

(東方学院講師・Ph. D.)